

短歌季評

今回は、日本経済新聞の歌壇で二〇二二年、年間を通しての秀作一七首（二〇二二年十二月一七日掲載）を見てみたい。選者は遥空賞を受賞している三枝昂之氏である。これは朝日新聞の「日曜歌壇」とどこいいか、あるいはさらに落ちる印象がある。

最初の四首を見てみよう。

ウクライナの子守唄とはつゆ知らずもいちど歌わん花は
どこへ行つた
デ・シーカの「ひまわり」の野の悲しみよ。両国の国花
は同じ向日葵
その戦スイスでさへもおろしやに一分の理すら無しと言
ふほど

校内に世界地図描き国連への加盟祝ひし小四のころ

世界に關した題材ばかりが並んでいるのは偶然か——それにしてもここには詠い手自身の生に根差した深い感情はどこにもなく、頭の先つぽで知識・情報の部類を触知した浅い心の動きに終始している。作つた本人は新しい発見に

て、命や人生を負う主体の息づきは感じられない。世間の事を言っていれば短歌になると思つて作っている、その姿勢が誤っている。その程度のことならば、ツイッターにも呟いていれば十分で、音数を合わせてわざわざ短歌にしなくてもいいだろう。五七七の音数を取ることに、もっと深い、命との向き合いが必要で、自身の生きている今への感慨が結節していなければならぬだろう。ここに年間の「秀歌」として取り上げられたものには、それが存在しない。歌に核がない。短歌とは呼べないものだろう。これらを「秀歌」として選んでいる選者の見識を疑う。極めてまずい料理を食べさせられた不快感が残る。生きることの困難や辛さを通して、生かされている恵みに触れ、その発光の奇跡に到達する過程がここにはない。言葉が腐りかけている。

現代の都市生活では、確かに自然と触れ合い、自然の様相と親しく交感することは、なかなか難しいことかもしれない。しかし私たちは結局空の下でしか生きられない。いかに建物の中に籠ろうとも、仮想空間が広がることも、結局は大空の下にいる。逆にそれを感じ、そこへ開かれていく手段として、短歌はいい契機にもなり、扉にもなる。自然や大いなるものと、その交感のうちに存在を深め合うことが、人を謙虚にし、真の力を発揮させる。

その道へ通じる歌の伝統的な姿を、自覚的に回復させて

心を動かしていても、読む者には「ああそうですか」程度のものしか伝わらず、文芸の一つの意義となる深い「共感」にまではとても降りていかない。

最初の四首だけかもしれない、いくらなんでもこんな歌ばかりではなく、あとから少しはマシな歌に出会えるだろうと思つて読み進めていくと、むしろだんだんひどくなる。

閉館の岩波ホールを忘れまい「カティンの森」の記憶とともに

そんなことで人を殺めてしまふかと想像超える事件が起きる

脳内でごめかごめかごめの声がする嫌われるのは本当に怖い初恋の人と暮らせたエリザベス幸せでしたね 私もそうよ

最後は特にひどい形で終わっている。

三密も儲け話の蜜も避けけふも家居に小三治を聴く
明日家に居るかどうかと訊く娘居るが仕事だ孫は見れぬぞ

これらは、音数は合っているが、はたして短歌と呼べるものだろうか——首を傾げてしまう。どれも他人事であつ

いかなければならぬだろう。

「ヒムロ」九一六号（二〇二二年十二月号）には、日経新聞の歌壇よりも心に響く歌がたくさんある。

散り際の藤の花房揺らしつつ夕風一筋庭を吹き抜く
病室を一人点して採尿す尿瓶に響く音の虚ろに

武田良文

雨に伏し花穂汚れつついぬたでのその根は確と土摺みをり

中山やすゑ

こんもりと咲く八重桜揺らしつつ丘吹く風に花の匂いす
うす日射せば細ぼそと鳴く蟬いとほし庭の木下に抜け殻のあり

有賀菊子

走り穂の稲田暗みて時折りに蛙鳴き立つ雨の兆しに

小林かつ子

これらは地方など自然に近く居住していないとなかなか作れない歌かもしれないが、自然と向かい合うかすかな瞬間、わずかな命に触れる発見は、感覚を鋭敏にしていれば、あるいはまた心を空しくしていれば、可能であるように思う。身近に、深さを知る契機はたくさんあるはずである。

（五十嵐勉）

三たび歌よみに与ふる書

正岡子規

連載第三回

前略。歌よみのような馬鹿な、のんきなものは、またといないものでありましょう。歌よみの言うことに耳を傾ければ、和歌ほどよいものはほかにないと、つねに誇りに思っているのですから、歌よみは歌よりほかのことは何も知らないがゆえに、歌が一番よいものであるように自惚れているのです。彼らは和歌に最も近い俳句すらも少しも理解せず、十七字でさえあれば川柳も俳句も同じと思っているほどの呑気さなのです。またして漢詩を研究するのでもなく、西洋には詩というものがあるのやらないのやら、それもわからない浅学のありさまで。まして小説や戯曲も、和歌と同じ文学に属していると聞くと、決まって目を丸くして驚くのです。このように言うあまりにひどい悪口誇り、礼儀を知らない愚か者と思う人もいるかもしれませんが、実際そうなのだからしかたがないところでしょう。もし私の言うことが誤っているとお思いなら、今いわゆる歌よみと言われている人の中から、一人でも、俳句を理解する人を御指名していただきたい。私は歌よみに対して何の恨みも持っていない立場から、このような悪口を放たなければならぬことを、察していただきたいところです。

歌が一番と言うのは、もとより理屈も根拠もないことで、一番とする根拠は毛一筋もありません。俳句には俳句の長所があり、漢詩には漢詩の長所があり、西洋の詩には西洋の詩の長所があり、戯曲には戯曲の長所があります。その長所はもとより和歌の及ぶところではありません。理屈は置くとして、いったい歌よみは和歌を一番よいものと考えて、それをどうするつもりなのかと聞きたいものです。歌が一番よいものならば、どうでもこうでも、上手でも下手でも三十一文字を並べさえすれば、天下の第一のものであつて、秀逸と称される俳句にも、漢詩にも、洋詩にも優っていると思うのでしょうか。その量見を聞いてみたいものです。最もいい俳句、漢詩などに対して、最も下手な歌でさえも優っているものであるならば、だれも俳句・漢詩などに骨を折るような馬鹿者はいないでしょう。もしまた俳句・漢詩などにおいて和歌よりいいものがあり、和歌にも俳句・漢詩よりも悪いものがあるというのなら、和歌だけがいちばんいいものではなくなるでしょう。歌よみの浅い見方にはいままさらながら呆れてしまいます。

俳句には調べがなく、和歌には調べがある、ゆえに和歌は俳句より優っていると、ある人は言います。これはあながち一人だけが言っていることではなく、歌よみ仲間ではこのような説を抱いている者が多いことも存じています。歌よみたちは調べということをつたいへん誤解しています。調べにはなだらかな調べもあり、迫ってくる調べもあります。平和な、長閑な様子は、驚を吹き飛ばすほどの荒々しき趣向で、調子の強いことは並ぶものがなく、この歌を声に出して読むと、穀の音を聞くような心地がします。賀茂真淵がすでにこのようであるとするならば、真淵以下の歌よみは言うまでもありません。このような浅薄な歌よみたちに、蕪村派の俳句集か盛唐の漢詩集かを読ませたいのですが、奢りきっている歌よみどもは、宗旨以外の書を読むことは、承知しないでしょうから、勧めるだけ野暮でしょう。

ご承知のように、私は歌よみの人たちから局外者とか素人とか言われる身ですので、詳しい歌の学問はやらす、格が何だとか、文法が何だとか、少しも知ってはいないのですが、大体のところの趣味がどうかという点で、自ら信じるころがあります。この点においてかえって専門の歌よみの不注意を責めることができます。このように悪口を申し上げる私を野次馬と同様に見る人もあるでしょうが、私がただの野次馬であるかどうかは、これを読むあなた様が、お分かりになることでしょう。異論があれば誰でも私の所に來てくれるよう、貴兄よりお伝えください。三日三晩でも続けて議論いたしましょう。熱心さにおいては、決して普通の歌よみどもには負けることはありません。感情が激しくなつてしまい、筆が走るまま、失礼の言葉も多くなりましたが、御海容くださいませよう。拝具。

(明治三十一年二月十八日)『日本』掲載

正岡子規



雄々しく強いものは、一首も見当たりません。「飛ぶ鷲の翼もたわに」の一首は、真淵の歌の中でも佳い作品ではありますが、意味ばかり強くて調子は弱く感じられます。実朝をしてこの意匠を詠ましめば、かような調子には詠まないと 생각합니다。「ものふの矢なみつくろふ」の歌のごと